

## 近代農業の先駆者



すぎえひでなお  
杉江秀直 (1832~1914)

杉江秀直は、170石の知行<sup>ちぎょう きゅう</sup>を給<sup>たま</sup>した加賀藩士<sup>まさよし</sup>富田方穀<sup>まさよし</sup>の与力<sup>まさよし</sup>でした。秀直は、明治維新<sup>めいじいしん</sup>後、国家の興隆<sup>こうりゅう</sup>には農業の振興<sup>しんこう</sup>が不可欠<sup>ふかざらぬ</sup>と考え、欧米の農業技術<sup>おうべい</sup>を研修<sup>けんしゅう</sup>するため、東京学農社<sup>とうきょうがくのうしや</sup>に学びました。

1876年(明治9)に帰郷<sup>ききょう</sup>した秀直は、現在の<sup>いま</sup>本町二丁目<sup>ほんまちにじょう</sup>から住吉町<sup>すまきちょう</sup>にかけての地に、農事社<sup>のうじしや</sup>を創設<sup>そうせつ</sup>し、近郊<sup>きんこう</sup>の農村青年<sup>のうそんせいねん</sup>

に、農具<sup>のうぐ</sup>の改良<sup>かいりやう</sup>や野菜<sup>やさい</sup>の栽培<sup>さいばい</sup>、畜産<sup>ちくさん</sup>など欧米<sup>おうべい</sup>の農業<sup>のうぎやう</sup>を教えました。

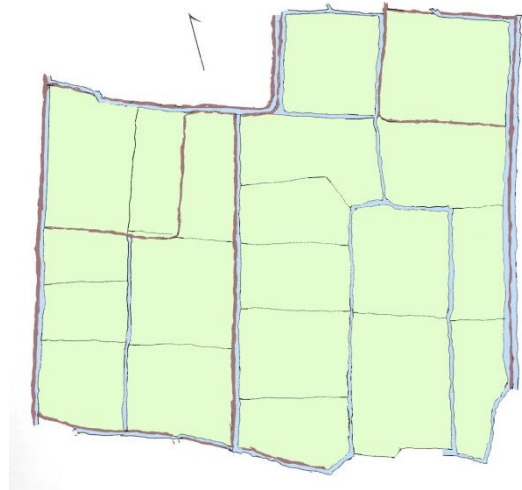
石川郡立模範農場<sup>もはんのうじょう</sup>となった農事社<sup>のうじしや</sup>の耕地<sup>けんち</sup>で、1887年(明治20)に日本で最初の耕地整理<sup>でんくかいせい</sup>である田区改正<sup>でんくかいせい</sup>が実施<sup>じし</sup>されました。田区改正<sup>でんくかいせい</sup>は、小さな田<sup>あぜ</sup>を集約<sup>あせ</sup>して大きな田<sup>あぜ</sup>にすれば、畔<sup>あぜ</sup>や農道<sup>のうだう</sup>が少なくなり耕地<sup>けんち</sup>が増えるということから実践<sup>じしん</sup>され、はじめは2町5反8畝3歩<sup>ちようたんせい</sup> (7,743坪=25,597㎡)であった耕地<sup>けんち</sup>が、実施後<sup>じしんご</sup>は2町7反8畝6歩<sup>ちようたんせい</sup> (8,346坪=27,590㎡)になり、2反3歩 [603坪=1,993㎡] も増え、この実験<sup>じしん</sup>は大きな成果<sup>せいこく</sup>をあげました。

農事社<sup>のうじしや</sup>で学んでいた石川郡上安原村<sup>かみやすはら</sup> (金沢市) の高多久兵衛<sup>たかたきゆうべえ</sup>は、石川式田区改正<sup>いしかわしきでんくかいせい</sup>方式<sup>かんしき</sup>を編み出して、全国<sup>ぜんこく</sup>に先駆<sup>せんこ</sup>けて村単位<sup>むらたんい</sup>での耕地整理<sup>けんちせいり</sup>を実施<sup>じし</sup>しました。以降<sup>いこう</sup>、耕地整理<sup>けんちせいり</sup>は国内各地<sup>こく内各地</sup>で行われ、農業生産<sup>のうぎやうせいさん</sup>は向上<sup>こうじやう</sup>していきました。

※尺貫法の土地面積 1町=10反(3,000歩)、1反=10畝(300歩)、  
1畝=30歩、1歩=1坪(3.3㎡)



田区改正 実施前図



田区改正 実施後図

のうじしやあと  
農事社跡（市指定記念物 史跡）



1968年（昭和43）、明治100年の記念と、わが国の耕地整理の先覚的役割を果たした農事社を後世に残すことを目的に、農事社の跡地である住吉町に石碑を建てました。

このように、農事社は、わが国における農業近代化の出発点といえ、杉江秀直の功績は極めて大きいといえるでしょう。